

医心 伝心

花粉症はなぜ増えたのか

県医理事 金子 敏行

今年のスギ花粉は大変でした。まぶたを真っ赤にはらした患者さんも多く、花粉症デビューした人もかなりいました。私自身も目のかゆい日が続き、点眼のお世話になりましたが、3月にゴルフコンペの予定がなくて助かりました。毎年春となれば患者が押し寄せることに今では慣れてしまいましたが、昔はそうでもなかったような気がします。花粉症の委員会に所属したのを機に、増えた理由をあらためて勉強してみました。専門にしておられる先生方には今更かもしれませんがお付き合いください。

スギ花粉症は1964年、初めて報告されました。花粉飛散量は60年代からの相模原市の計測があり、当時と比べ3倍ほどに増えています。特に70年代後半から大量飛散（近年の多い年の半分ほどですが）の年が度々あり、患者数が爆発的に増えたようです。寄生虫感染が減ったことや腸内細菌叢の乱れなど、患者側の要因を挙げる学説もありますが、きちんと検証されておらず、やや眉唾です。大気汚染の影響は、ある程度まではあるのでしょうが、新たな大陸からの汚染物質の飛来などあるにしても今の日本の大気は高度成長期よりはきれいなので、増加の原因としては話が合いません。やはり花粉飛散が増えたことが最も重要なファクターでしょう。

そして花粉飛散がなぜ増えたかを調べてみると、単純にスギの量が増えたことと、人工林の樹齢の構成が極端に花粉飛散年齢に偏ったことが原因のようです。戦時中は軍需用、戦後は復興建材用に、林があまり植樹手当されず乱伐されたために一時期針葉樹建材が大きく不足し、1950年代から大々的にスギ・ヒノキの植林が行われました。乱伐で

禿山状態だった人工林の再建の意味で始まったのですが、当時木材単価が高くスギ材の儲けが見込めたため、国有の自然針葉樹林も伐採されブナなどの広葉樹林もスギ人工林に変わっていきました。一部銘木以外の広葉樹はパルプ原料などになりました。1958年に国有林の伐採に関する規定が撤廃されたところが転機だったようです。一方で、木材需要が依然満たされないため、1960年には外材の輸入が自由化されます。結果、国産材が値崩れして林業が生業として成り立たなくなり、人工林が放置される例が増えました。スギの場合、1haに3500本植樹し、間伐を繰り返して伐採時期までに700本にするそうですが、間伐をしないと太く育たず、枝打ちしないとフシが出て建材としては使えない、という悪循環です。これら、増えたスギ林が適切に管理されないまま花粉散布年齢になったことが花粉量の増大の原因となったのです。

よく効く薬も近年増えてきましたが、やはり花粉を気にせず過ごせる環境が望ましいです。自分が花粉症になったとたんに多摩のスギ林を減らせ、と石原前都知事が言い出したことがありましたが、そのとおり、結局花粉を減らしていくしかないようです。外材に頼ることは海外の森林荒廃をひき起こすので、木材自給率を高めるためにも健全な林業を育成し、かつ無花粉スギの比率を高める。需要以上のスギ林はブナなど自然林に近い構成の保水用林に戻していくなどの対策が必要でしょう。政治に関わる部分で、医師会の仕事とはちょっと違うかもしれませんが、近年特に増えた花粉症の子供たちを見るにつけ、医師として生活環境の保全に声を上げることは必要だと思うのです。